２０１２年１１月２２日

韓国・朝鮮人被爆者問題を考える（レジュメ）

髙　實　康　稔

1　在外被爆者援護の進展と課題

（１）進展の経緯

①原爆二法の「国家補償的配慮」を引き出した孫振斗裁判（最高裁、1978･3）

②在外被爆者排除の「４０２号通達」（厚生省、1974･7）

③「被爆者はどこにいても被爆者」を引き出した郭貴勲裁判（大阪高裁、2002･12）と李康寧裁判（福岡高裁、2003･2）、ついに「４０２号通達」の廃止（2003･3）

④「手当てや葬祭料の在外申請を可能にした崔季澈裁判（福岡高裁、2005･9）

⑤年金証書「時効」の撤廃（ブラジル被爆者訴訟、広島高裁逆転勝訴、2006･2／崔季澈第２次訴訟、福岡高裁逆転敗訴、2007･1／ブラジル被爆者訴訟、最高裁勝訴確定、2007･2／崔季澈第２次訴訟、最高裁逆転勝訴、2008･2）

⑥広島三菱重工元徴用工在韓被爆者訴訟で、「４０２号通達」に対する慰謝料（１２０万円）の国家賠償判決（最高裁、2007･11）、広島・長崎・大阪地裁で在外被爆者の国家賠償請求訴訟（2012 年 4 月末現在：広島・長崎・大阪地裁での和解成立は生存被爆者 2,632 人、死亡被爆者・遺族 35 人、遺族の和解未成立 414 人）

⑦「被爆者援護法」の改正（2008･6）、被爆者健康手帳取得に対する「来日要件」の撤廃施行（2008･12）

⑧手帳申請の「来日要件」は違法との勝訴判決を引き出した鄭南壽裁判（長崎地裁、2008･11）、被告長崎県は控訴、同種裁判の大阪地裁判決（2009･6）を受けて府知事が「控訴しない」と表明、長崎県知事も「控訴取り下げ」を表明

⑨原爆症認定の「来日要件」の撤廃（2010･4）

⑩証人がいなくても証言の信憑性により手帳交付を命じる判決を引き出した張令俊裁判（長崎地裁、2012･9）

（２）課題

- 医療費給付の平等化：上限（17 万円 1 千円）の撤廃（2011 年 6 月、韓国人生存者 2 名と遺族１名の３名が上限撤廃を求めて大阪地裁に提訴、2012 年３月、韓国人３名が長崎地裁に、在米被爆者 12 人が広島地裁に提訴）
- 手帳取得に対する条件（証人や証拠）の緩和：韓国原爆被害者協会に所属しながら、手帳を取得できていない人が 2012 年 1 月現在 120 余人。このうち 1 名が 2011 年 5 月、長崎市の交付申請却下の取消を求めて長崎地裁に提訴、続いて 3 名が同年 12 月提訴。４０２号通達の過ちが未取得の原因であり、本人の証言を尊重すべき。
- 張令俊裁判勝訴判決に対する長崎市の控訴は被爆者援護に反し、許されない。
- 朝鮮民主主義人民共和国の被爆者援護（約２千人のうち約 400 人のみ生存という）。国交がないのは台湾も同様であり、理由にならない。

2　徐正雨さんの体検と訴え（配布資料参照）（『原爆と朝鮮人』第２集より）

3　長崎市および周辺地区の朝鮮人労働者の飯場・寮・長屋等の調査結果（『原爆と朝鮮人』第１集）とその後の追跡調査

（１）　長崎在日朝鮮人の人権を守る会は長崎市内全域の実態調査結果として『原爆と朝鮮人』第１集（1982）を刊行し、総数 19,391 人、被爆死者数 9,169 人と発表したが、その後の追跡調査を踏まえて『朝鮮人被爆者―ナガサキからの証言』（社会評論社、1989）では、総

数 21,384 人（入市被爆推定 250 人を除く）、被爆死者数 10,278 人と改めた。さらに『原爆と朝鮮人』第５集（1991）の段階では三菱長崎造船所の平戸小屋寮の存在をはじめ、新たな証言による修正を加えて、総数 22,198 人とした。そして第１集の再版（2002）時点では、水の浦トンネル工事の 60 人（より多数の可能性が高い）を加えて総数 22,258 人と推定した（あとがき「再版に当たって」に記載）。

（2） しかし、その後さらに、三菱長崎造船所の朝鮮人徴用数は 5,975 人と判明（長崎県知事の労働省勤労局への報告、1946 年 7 月 24 日付、90 年代の韓国政府への通知文書に含まれる）。この人数は 1943～44 年の合計数であるから、'42 年からの在日朝鮮人徴用（800 人と推定）が含まれていないことから、同造船所の朝鮮人労働者総数は 6,775 人とすべきで、従来の推計より 2,028 人多い計算となった。

（3） 三菱造船の朝鮮人徴用工寮は木鉢寮、福田寮、平戸小屋寮の他に、小ケ倉寮（3,000 名）、稲佐寮、丸山寮の存在が韓国の強制動員被害調査委員会の許光茂氏の論文（2011）により判明し、追跡調査を迫られた。稲佐寮は証言者を得て、遊郭の接収であることが明らかになった。丸山寮も同様と思われる。小ケ倉寮の解明も映像と証言により画期的に進んだ。

（4） 長崎港運（長崎市出島町）に 112 人、日本通運長崎支店（長崎市台場町）に 32 人の強制連行が新たに判明した（知事報告、名簿あり）。

（5） 原上晃明鉱山（西彼杵郡蚊焼村大字布巻、知事報告、名簿なし）に 138 人の強制連行が新たに判明した。この鉱山の実体は未だに不明であり、調査を要する。

（6） 第１集の再版の時点で気づくべきであった重要な証言（1993 年）の見落としがあった。それは三菱兵器製作所住吉トンネル工場の掘削工事に従事した朝鮮人労働者 150 人で、その宿舎は赤迫のガード沿いに３棟あった（第６集 216～220 頁参照）。この見落とし分と上記（2）および（4）（5）を加算すれば、総数 24,718 人となる。この人数は県下全域の強制連行実態調査の累計から逆算した長崎在住の推定数 26,500 人に近い数値である。

（7） 香焼の朝鮮人は造船 5,000 人、炭坑 500 人と推定され（『原爆と朝鮮人』第５集、281 頁）、長崎市内の救援や復旧に派遣された者も多く、爆心地から半径 12km 圏内として全員被爆者と認めるべきである。香焼小学校在籍の児童は 81 名にのぼる（第５集 275～279 頁）。

（8） 「朝鮮人の被爆」（長崎市発表、1982 年 6 月）は、少数ながら爆死者の姓名を知るうえで貴重ではあるが、被爆者総数（12,000～13,000 人）および爆死者数（1,400～2,000 人）の推定は過少であり、杜撰かつ差別的といわざるをえない。長崎在日朝鮮人の人権を守る会の推定に、香焼や伊王島（推定 1,000 人、第５集 273 頁）と入市被爆を含めれば３万人を超える。目下、総括集としての第７集の刊行を目指している。

（9） 端島（軍艦島）に強制連行された朝鮮人３名を訪ねて、原爆後の復旧作業に派遣されて入市被爆したことが明らかになった。軍艦島の世界遺産化に関する見解も重要である（『軍艦島に耳を澄ませば』社会評論社、2011 年、参照）。

（10） 端島および高島にはサハリンからの二重徴用があり、家族離散を強いられたことも忘れてはならない悲惨な事実である。強制動員被害調査委員会『酷い別離』を第７集に掲載する。

（11） 広島も長崎も被爆者の約 10%は朝鮮人であったと推定されるが、長崎の場合、最も一般的に提示される死者 73,884 人（1950 年、長崎市原爆資料保存委員会報告）のうち、32,054 人しか明確になっていない現状（2009 年、長崎市原爆被爆者動態調査事業報告書）を銘記すべきである。屍体検視名簿をはじめ、原爆被災関係資料のなかに朝鮮人が含まれていることはいうまでもないが、行政も企業も軽視した事実を見逃してはならない。

付記 三菱兵器製作所住吉トンネル工場の掘削工事を強いられた朝鮮人の強制労働は 1944 年 9 月（「長崎兵器製作所史」に記載の掘削開始時期）よりも早く、1943 年 1 月以前にさかのぼるとみられる。強制動員被害調査委員会への被害申述があり、委員会によって認定されているからである。海軍は自らが強行した戦略爆撃の「教訓」としても、米軍の戦略爆撃に対する防御対策を早期に実施することを迫られたものと考えられる（前田哲男『戦略爆撃の思想―ゲルニカ、重慶、広島』凱風社、2006 年、参照）。

“監獄の島”端島炭坑に連行されて

徐正雨（ソ・ジョンウ）　54歳　男（＊2001年８月２日、逝去された）

1928（昭和３）年10月２日生

長崎市緑が丘町220番地

証言日　1983年７月３日および同７月９日（端島にて）

私は慶尚南道宜寧郡宜寧面の小農の家に長男として生まれましたが、昭和７、８年頃、父母が私を残して名古屋へ渡日したため、祖父に養育されました。祖父は学のある人で、家庭教師のように私に勉強を教えてくれました。財産はあったのですが、伯父、つまり父の兄が浪費して食いつぶし、祖父は私が７、８歳のとき、失意のうちに世を去りました。しかし私のことは自分の弟に面倒を託していましたので、祖父の死後、私はそこに預けられ、下働きの毎日を送りました。山に薪を取りに行ったり、朝、牛をつれて家を出ますと、昼ごはんは食べずに夕方帰ってくるような毎日でした。牛の草とりも、十歳にもならない私にはつらい仕事でした。米は供出、供出で、日朝結託の警察の目は厳重で、おいしいことで有名なあの朝鮮米はみな供出させられて、自分たちは麦やソバ粉ばかり食べていました。飛行機の油にするとかで、松脂も取らされました。ノルマがあるので、松の木を掘って懸命に取りました。

おじさん（祖父の弟）は体が弱く、仕事が十分にできないので、私の成長につれて、私を頼りにしてくれました。私が17歳になったら結婚させると言っていました。ところが忘れもしません、14歳のときです。面（村）役場から徴用の赤紙がきて、私は日本に連行されてきたのです。徴用といっても、突然の強制であり、手当たり次第の強制連行と同じです。お分かりでしょう、14歳といえば、今の中学２年生ですよ。おじさんは、仕事手がなくなるので強く反対しましたが、相手は問答無用でした。私の村からは二名でしたが、強制的にトラックに乗せられ、市役所に着くと、14、５歳から20歳ぐらいの青年が何千人も集められていました。旅館に一泊し、翌朝、トラックを何台も何台も連ねて、長崎から諫早くらいの距離を行き、そこからは汽車で釜山へ運ばれ、連絡船で下関に着きました。そして夜行列車で長崎へは朝着きましたが、ここに連れて来られたのは300人ほどで、その全員が大波止から終着地の端島へと送られたのです。

私は名古屋に父母だけでなく、佐世保にも親戚がありましたので、日本のどこかに行かされても、機会をみて逃亡するつもりでした。けれども端島に着くや、すっかり希望を失いました。

ごらんのとおり、島は高いコンクリートの絶壁に囲まれています。見えるものは海、海ばかりです。こんな小さな島に、９階建ての高層ビルがひしめいています。驚きました。ここは坑口とは反対側の島の端っこですが、これらの高層アパートは当時からありました。私たち朝鮮人は、この角の、隅の２階建てと４階建ての建物に入れられました。一人１畳にも満たない狭い部屋に７、８人いっしょでした。外見はモルタルや鉄筋ですが、中はボ

ロボロでした。私が入れられたのは、ここです。この室番B102 とあるこの部屋です。今、見ると戦後、炭坑の診療所の病室になったんでうねぇ。それも今は廃虚で‥‥。私たちは糠米袋のような服を与えられて、到着の翌日から働かされました。日本刀をさげた者や、さげない者があれこれ命令しました。

この海の下が炭坑です。エレベーターで竪坑を地中深く降り、下は石炭がどんどん運ばれて広いものですが、掘さく場となると、うつぶせで掘るしかない狭さで、暑くて、苦しくて、疲労のあまり眠くなり、ガスもたまりますし、それに一方では落盤の危険もあるしで、このままでは生きて帰れないと思いました。落盤で月に４、５人は死んでいたでしょう。今のような、安全を考えた炭坑では全然ないですよ。死人は端島のそばの中ノ島で焼かれました。今も、そのときのカマがあるはずです。こんな重労働に、食事は豆カス 80%、玄米 20%のめしと、鰯を丸だきにして潰したものがおかずで、私は毎日のように下痢して、激しく衰弱しました。それでも仕事を休もうものなら、監督が来て、ほら、そこの診療所が当時は管理事務所でしたから、そこへ連れて行って、リンチを受けました。どんなにきつくても「はい、働きに行きます。」と言うまで殴られました。「勝手はデキン。」と何度聞かされたことでしょう。端島の道はこの一本道だけです。この一本道を毎日通いながら、堤防の上から遠く朝鮮の方を見て、何度海に飛び込んで死のうと思ったか知れません。どうですか、この白く砕ける波、あのころと少しも違いません。仲間のうち自殺した者や、高浜へ泳いで逃げようとして溺れ死んだ者など、４、50 人はいます。私は泳げません。しかし、何か運があったんでしょうね。５ケ月後に、私は長崎市にある三菱の幸町寮に移動を命じられ、島を脱出することになりました。あのまま残っていたら、本当に生きてはいないと思います。島にいた同胞の数は、私たちより先に２百人ばかりいましたから、合計で５、６百人だったでしょう。上下各５室の２階屋１棟と、各階５、６室の４階建て４棟に詰め込まれていました。あの同胞たちのことを思うと、いつまでも胸がしめつけられる思いがします。軍艦島なんていっていますが、私に言わせれば、絶対に逃げられない監獄島です。

陸の長崎に来た私は、今度こそ逃げられると思い、嬉しくてたまりませんでした。仕事はカシメを打つ重労働でしたが、食事は端島とは段違いで、白米に馬肉、鯨肉も出ました。しかし、朝７時半ごろ、一列に並ばせられて幸町寮から造船所に向かう途中は、前後左右に憲兵がつき、列をはみ出す者は容赦なく蹴りますし、塀に囲まれた寮内は監視がぐるぐる回り、とても逃げられる状態ではありませんでした。その点を除けば、隣りのレンガ造りの寮には外国人捕虜がいて、言葉が通じないので話はしませんが、何となく気持の通じるものがあり、また仲間も大体同じ歳ごろで、手づくりの花札をやったり、風呂場で暴れあったりで楽しいこともありました。風呂場当番、食事当番を決めて助け合いました。今もよく思い出します。けれども、カシメ打ちは本当にきつい仕事です。冬は何とかなりますが、夏は火を使うので耐えきれない労働です。仲間の中にはとうとう食欲がなくなり、衰弱し、栄養失調で竹の久保病院へ入院した者や、そこで死亡した者も数多くいます。そ

うですね、80 人くらいは入院したでしょう。職場では休み時間には丘の上で体操をするのですが、ＮＨＫの体操みたいなもので、この仕方が悪いとまた殴る、蹴るのリンチを受けました。仕事はきついし、若いときですから眠い一心でしたが、次第に空襲が激しくなり、焼夷弾、サイレンと、そのたびに防空壕に出たり入ったりで、ただでさえ眠いときに叩き起こされて、腹が立ちました。逃げよう、逃げようと思い続けて果たせないうちに、とうとう８・９を迎えました。父は 49 歳で亡くなりましたが、当時、一度だけ寮を訪ねてくれ、そのとき、もし逃げられたらまず佐世保の親戚に行き、そこから名古屋へ来るように話し合ったことがあります。

あの日、８月９日、私は運よく出勤の日で、飽の浦の造船所で被爆しましたが、もし交代で寮内にいたら当然爆死しています。300 人のうち 100 人は交代で休んでいたのです。B 29 の大きい飛行機が飛んできて、ピカッと光ったかと思うと、ものすごい爆音がしました。私は足の親指に鉄板が舞い落ちて怪我をしました。後に手術をして、今も傷痕があります。ガラスが割れ、バラックは崩れ、あちこちに火の手と煙が上がりました。残ったのはしっかりした家だけです。私たちは強制連行者が入れられていた木鉢寮へ行くように言われ、そこで３、４日滞在しました。それから、大橋、住吉方面の道路整理を命じられ、見るも無惨な死体や瓦れきの整理に当たりました。よく見ないと、犬か、豚か、馬か分からない有様でした。煙がくすぶり、人や動物の死体の臭いでいっぱいでした。焼けただれた電車の中に、丸焼けの死体がころがっていました。

８月 15 日、天皇の放送があって、私たちはやっと自由になりました。仲間はどんどん船で帰国して行きました。私も南さんという飯場頭をしていた人から誘われましたが、すでにおじさんは死亡していましたし、両親は名古屋ですので、断りました。橋の下で寝たり、３、４日食事なしのときもありましたが、そのうちに、土木工事の飯場を持っていた安田さんという同胞の下で働くことになりましたが、彼も２年前に帰国して今は日本にいません。安田さんの奥さんは日本人でした。昭和 22、３年ごろは、浜の町にあったヤミ市で、日本人の持ってきたものを売ったりして生活を立てました。あの当時は、身よりのない復員兵がウロウロして、ルンペンさながらでした。飛行服や軍靴もよく売りに出されました。その後、屋台を一台持ち、元手を作って小倉に行き、背広屋を開店するほどになりましたが、雇った日本人の店員にだまされて無一文になり、再び長崎に戻り、網場の桝本さん、本名は朴か李というと思いますが、彼の世話になりました。

私が今のような体になったのは、炭坑、造船所での強制労働、そして、原爆を受けたからですが、桝本さんのところを出て、また本河内の安田さんの家にいたとき、咳とともに洗面器半分ぐらいの多量の血を吐きました。これが最初の喀血です。私は十分苦労してきましたし、特にあの端島での日々を思えば、少々のことは我慢できる人間です。けれども、喀血ほど苦しいものはありません。安田さんの奥さんが病院へと言うので、いやだと断ると、子供にうつるから出ていってくれと言われ、仕方なしに今の親和銀行本店のところにあった保健所に行きますと、直ちに入院ということで、町田病院に移されました。これが

入退院のくり返しの始まりです。安田さんの奥さんは、薄い布団の上下を用意してくれましたし、タバコを買ってきてくれたり、子供を背負って面会に来てくれたりで、物のない時分だけに、今もその親切は忘れられません。喀血は半年で止まりました。そのとき一緒に入院していた人はみんな死にました。私は生活保護を受け、米一升 150 円の時代に、月 1,200 円では足りず、地金商やバーを経営していた同胞に無心して、福祉事務所から派遣された付添いのおばさんに渡していました。今なら生活保護で最低生活はできますが、当時は無理でした。

あれから 31 年間、私はついに健康な体に回復することができず、大村、愛宕、東望、住吉、小江原と、療養所を転々とし、13 年前、朝起きると枕もとに雪がたまっているような隙間だらけの療養所を逐電して、以後今日まで通院生活を続けています。あの最後の逃亡は、毛布一枚の寒さの上に、散歩好きの私に外出も許さない不自由さから、やむを得ず決行したものです。どうせ入退院の明け暮れと諦めていましたが、病院で日本人患者から差別され、いじめられるのには耐えられませんでした。私も負けてはいませんから、「朝鮮人が寝言を言う」などと言われると、それだけ余計だと言って抗議し、時には殴られる、殴るといったこともありました。病院の先生がとめに入って、徐さんは優しく真面目だし、と日本人に注意すると、「朝鮮人の肩を持つ」と言って先生にくってかかる始末でした。また一年も寝ていると、運動不足から胃潰瘍になって、やせこけたこともあります。昔から歩くことの好きな私には、外出禁止の長い入院生活はひどくこたえました。退院して４畳半一室の間借りで栄養も取れない生活をしていると、また悪くなります。今は通院ですが、「息切れがする。」と言うと、医者は「あんたの肺なら仕方ない。無理せず、調整して生きなさい。」と言うだけです。先生にしてもこう言うしかないのかも知れませんが。朝鮮人被爆者の記録映画「世界の人へ」を作った盛善吉監督と一緒に診療所へ行ったとき、医者が私の肺のレントゲン写真を見ながら、『肺がない。』と言うたんびに、盛先生が２回も３回も振り向いてはじっと私の顔を覗き込んだのを覚えています。

17 歳になったら結婚させると言っていたおじさんの言葉を思い出しながらも、私はもう結婚のことはあきらめていました。しかし、８年前、病院で知り合った日本人女性と結婚して、子供もできました。いまやっと小学一年生の双子です。結婚と申しましたが、実は戸籍上の結婚はしていないのです。子供たちは私を「お父ちゃん、お父ちゃん。」と言って慕ってくれますが、籍は女房の籍にしているのです。理由はお分かりでしょう。学校に行けば、「朝鮮人の子」といじめられるに決まっています。二世、三世にはナマリはありませんが、私のように 14 歳まで朝鮮で育った者は、どうしてもナマリが抜けません。直ぐ朝鮮人だと分かって、家を借りるのにも大変苦労してきました。学校でいじめられて自殺した子供もいるではありませんか。強くなれ、いじめ返せ、と私は言っています。そればかり言っています。日本人の中には理解のある人もいることは知っていますが、正直に言って、普通の日本人はものすごく悪いですよ。これは本当です。私はいつも言い返しますが、こんな馬鹿と話してもいっしょと思ってあきらめたことあります。革新党だから差別しない

ということはありません。「朝鮮人は本国へ帰ればよかとに。日本いれば大迷惑。」と言った日本人をかばって、私を暴力的に威圧した革新議員だっています。苦い、苦い体験です。私は好きで日本に来たのではありません。あと３カ月で55歳にもなりますが、子供は小学一年生、結婚もできない、病気はなおらないと宣言され、結核ということで保健所がうるさく言って、子供は施設に預けている有様です。せめて近くの施設で、よく面会に行けるところならいいのですが、中央児童相談所に相談しても、双子だからダメと理屈にならないことを言って、遠くの施設から近くの施設へ移してくれません。私にとっては「お父ちゃんが会いに来て。」という子供の言葉だけが救いです。

差別についても沢山話しましたが、こんなことはみんな日本政府の責任だと思うのです。朝鮮を植民地にして、われわれを強制連行した。その上原爆にまで会わせた過去を反省しないどころか、そのことをよく知っている政府が、行政が、なぜ先頭に立って日本人に知らせ、差別をなくすように努力しないのか。近くの朝鮮人に親切にするように言わないのか。私は抗議したい気持でいっぱいです。何もしてくれなくてよい、ただ差別だけはやめてくれと叫びたいのです。関東大震災のときの悪質なデマと朝鮮人虐殺だって、どれだけ反省されていますか。

日本は世界第２位の経済力とか言っていますが、戦後はあれほど貧しかったではありませんか。まがりなりにも平和だったからこそ栄えたと思うのです。戦争になれば、一部の者はもうかっても、すべてが終わりです。スーパーに行ってみませんか。何でもあるでしょ。昔はサツマイモばかり。ヌカ、メリケン粉ばかり。私は健康を害してはいても、差別のない社会、平和な社会のために、死ぬまで運動したいと思っています。

（「原爆と朝鮮人」第Ⅱ集、69～77頁）